

氏 名 武居 雅子

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1893 号

学位授与の日付 平成29年3月24日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 香道と文学
－江戸中期の香道伝書による文学受容の研究－

論文審査委員 主 査 教授 神作 研一
教授 落合 博志
准教授 入口 敦志
教授 堀口 悟 茨城キリスト教大学
准教授 濱崎 加奈子 専修大学

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

香道は、茶道、花道と共に三大遊芸とされ、室町時代以来の伝統的貴族文化として、公家、寺社、武家、富裕町人等の上層社会で行われてきた。薫物の時代の後、左右に分かれて香木の香りを競う「香合」を経て、十炷（種）香が行われたのは応永年間であり、ここに組香の原点が見られる。その後「古十組」と呼ばれる文学的テーマを持たない組香が生れ、江戸時代にかけて和歌を証歌とする組香が多作される。香りと文学との融合なくして組香の完成はありえなかったと言っても過言ではない。

香道には当初流派・流儀意識はなく、後に蜂谷家が志野流の家元制度を確立するまでは、厳しい師弟関係に縛られない立場で、香を嗜む人口が多数存在していたものと察せられる。その背景には、堂上方の雅遊の香が上流武家社会に浸透したこと、17世紀後半から18世紀初頭にかけて台頭した、都市部の富裕町人層の文化的要望があったことが考えられる。

香道の普及と伝承に伴って、相伝の次第や点前、組香、秘事や口伝、また香道全般の心得を記述したものが香道伝書である。江戸中期以降、家元を中核とした香の社会が志野流や米川流によって囲いこまれ、統制が取られた結果、各流派の伝書は自流のみを尊ぶ閉鎖的なものに収斂していく。これに対し御家流は江戸後期まで個別の師資相伝を踏襲していくが、師資相伝はその宿命として結束も小規模で弱いものになりがちである。伝授者による伝書の改変も生じ易く、伝書の錯雑化を招きやすい。

このようになる以前の古法を集大成した香道伝書が、大坂の大支流芳(1704ないし1710頃～1751頃)による享保から延享期の香道伝書群であり、流派に固定する以前の多様な情報や知見が収載されている。大枝は江戸中期の唐様流行を背景に、宋・明代の香に関する書籍を渉猟して、香木の産地や伝承経緯を明らかにすると共に、諸書に組香の素材を求め、独自の組香を考案し文人趣味の香道を模索した。大枝の伝書『香道秋の光』『香道千代の秋』『香道滝の糸』『香道軒の玉水』は京都・江戸・大坂の書肆によって板行され、広く流通することになる。

一方、江戸では元文年間に香道古法の集大成『香道蘭之園』10巻附録1巻が成立している。本書成立の発端は、御家流香人・鈴鹿周斎が、延宝初め江戸に下向したことによる。鈴鹿の御家流は早くに関東に分派した御家流と考えられ、三条西家との関係は認められない。周斎から伝授された栗本穩置が伝書草稿の錯雑を憂い、『江戸砂子』の著者・菊岡沾涼(1680～1747)の力を借りて旧原稿を訂正し、菊岡が『蘭之園』と名付けた。東山殿流、相阿弥流、志野流を冠した記事も含まれ、御家流のみに固執する姿勢は窺えない。本書は香の基礎知識、234の組香、香道具の図示と解説、名香目録、名香古歌古詩等を収載している。附録巻は「新組香并組香異説」と名付けられ、『香道秋の光』所載の大支流芳の新組香も含まれる。跋文からは、栗本・菊岡が『香道蘭之園』編纂にあたり、当時、三都で流通していた大枝の香道伝書を意識していたことが窺える。

本論文では、大支流芳による香道伝書と、江戸で編まれた菊岡沾涼による香道伝書を読むことにより、享保から延享にかけての香道における文学受容、特に組香においていかに文芸作品が受容されたのかを、実証的に解明することを目的とする。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

第一部は「大枝流芳の香道伝書を通して」と題し、第一章で、大枝流芳書写本『心遠齋香道叢書』34冊を調査し、執筆経緯を追った。叢書の大半は彼の師・大口含翠所伝の書であるが、新編15冊は大枝の考察を認めたものが多い。大枝は、故実の継承につとめ、御家流伝書確立に貢献すると共に、師伝の継承だけに終わらない研究的視座での伝書執筆を行っている。

第二章では、『心遠齋香道叢書』での大枝の研究が上記『香道秋の光』以下の刊本四書にいかんにか反映しているかを考察し、彼の創作組香における文学受容を検討した。彼は説話、漢詩、中国故事に取材範囲を広げ、江戸中期の唐様流行を背景に明風を享受して文人趣味の香道を模索し、同時に、地下社会に香道を伝播せしめたことを論じた。

第三章では『心遠齋香道叢書』後編五『香名引歌之書』での香名と引歌の関係を、和歌を中心に、続く第四章では漢詩を中心に考査して、これら引歌・引詩が、香りの印象を伝えるにあたっていかんにか機能したのかを提示した。そして、香名と引歌を重ね合わせるといふ享受の在り方が、その後の組香の世界での「証歌」「証詞」「聞きの名目」誕生の始発であろうことを述べた。

第二部「菊岡沾涼の香道伝書を通して」では、第一章で『香道蘭之園』の成立と概要を確認した後、第二・三・四章で組香の文芸享受を具体的に検証した。

第二章では、『香道蘭之園』二～七巻・附録巻を対象に、いかなる作品が組香の素材とされたのかを解明した。さらに、座の遊芸として、組香が連衆にいかんにか享受されたかを検討し、組香は聞香を伴う座の文芸と捉えるべきであるという結論を示した。

『夫木和歌抄』由来の組香証歌には、『夫木和歌抄』収載和歌と異なるものがあるため、第三章では『夫木和歌抄』写本、板本、西順編『夫木和歌集抜書』を用いて、異同の経緯を詳らかにした。その結果、『夫木和歌抄』由来の組香証歌は、いずれも『夫木和歌集抜書』収載の和歌であること、異同のある証歌は、西順自筆本『夫木和歌集抜書』に端を発した可能性があり、さらに天和2年板『夫木和歌集抜書』に依拠したらしいことを明らかにした。連歌の付合や証歌の検索に利用されたという文学における『夫木和歌抄』享受のほか、組香においても『夫木和歌抄』『夫木和歌集抜書』が享受されていた事実を指摘した。

『源氏物語』は組香の素材として最も多く用いられたと言え、『香道蘭之園』八・九巻の「源氏千種香」もその一つであるが、その内容を精査すると、必ずしも忠実な物語の再現はなされておらず、明らかに異なる事象が存在している。第四章では、「「源氏千種香」の依拠本を探る」と題して、梗概書を視野に入れて検討し、『源氏小鏡』古本系京都大学本の系統との関わりを確認した。

第五章では十巻収載「名香古歌古詩」を取り上げた。第一部第三・四章で扱った『香名引歌之書』に比べ、香名が同じでも引歌に異同が見られ、私撰集の和歌や連歌の発句によるものがあり、『香名引歌之書』よりは引用範囲が広いことなどを指摘した。

以上、享保から延享にかけての大枝流芳と菊岡沾涼の香道伝書を考査して、香道における文学受容の様相を検証した。香道が家元制度の出現によって統制される以前の、流派意識にとらわれず古法を集大成したこれらの伝書を読むことを通して、文学と香道がいかんにか融合したのかの解明を試みた。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

茶道や花道が早くから文化史研究の一領域として着実に進展してきたのに比べると、こと香道に関する研究の蓄積に物足りなさを覚えるのはわたくしどもだけではあるまい。香道御家流の三条西公正の執筆にかかる『香道一歴史と文学一』（淡交社、1977。*改訂新版1984）はその古典的な研究成果と呼んで良いが、あくまでも香道に関する基礎的研究にとどまっています、こんにちの科学的・実証的研究の水準からすれば、多くの面で研究の進展が望まれると見なければなるまい。

さて、本学位請求論文は、江戸中期（18世紀、特に享保から延享頃〈1716－47〉）に成立した香道伝書を対象として、とりわけ組香において、それが古典文学作品に大きく依拠していたことを初めて具体的に考証した労作であり、先行研究の不足を正面から補う意欲作と言うべきものである。特に、香道と文学の関係については上述のように総合的な研究が少なく、前人未踏に近い状態であったから、その領域を開拓した功績はまず認められて良い。「組香」とは、種々の香木を焚いてその香りを聞き香の異同を言い当てる遊戯のことであり、そこには和歌を主とした王朝文学が広く深く関わっていたというのである。

全体は二部構成。

まず第1部「大枝流芳の香道伝書を通して」では、四つの章を配して大枝流芳（？－1751以降）の香事を総合的かつ具体的に解明する。流芳の書写にかかる『心遠齋香道叢書』（実践女子大学日野図書館蔵・写34冊）の特質を分析して、写本による伝流の様態をおさえつつ（第1章）、『香道秋の光』（享保18年〈1733〉刊・中本3冊・附録1冊）、『香道滝の糸』（享保19年刊・中本2冊）、『香道千代の秋』（元文元年〈1736〉刊・中本4冊）、『香道軒の玉水』（元文2年刊・中本1冊）という刊行された四つの香道書にも目配りし（第2章）、さらに『香名引歌之書』（『心遠齋香道叢書』後編五）に記された、香名と引歌の関係を探っている（第3章・第4章）。

流芳をめぐる人物関係（伝記考証）が必ずしも詳しく解明されているわけではないために、流芳の学的基盤の形成過程（背景）にやや不透明なところが揺曳していたり、そもそも流芳以前の香道伝書に対する目配りにおいて不十分なところが見受けられたりするものの、特に第3章・第4章において、和歌や漢詩が、抽象的な香のイメージを具現化させる要として機能していることを初めて実証した功績は高く評価される。また、著名な古典だけでなく、『文机談』など音楽伝書収載の逸話や中国・明代の袁中郎の詩に取材した組香があることなどの指摘は興味深く、さらには、明風の享受による文人趣味の香道の展開という、より大きな視座を提示し得ている点も、最新の近世文学研究と密接に連動する極めて重要な問題だと思われる。

続く第2部「菊岡沾涼の香道伝書を通して」では、五つの章に分かって菊岡沾涼（1680－1747）の香事を多角的に分析する。その著『香道蘭之園』（宮内庁書陵部蔵御所本・写5冊・附録1冊）の成立を踏まえて（第1章）、そこに収載された組香が、『古今和

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

歌集』や『夫木和歌抄』などの和歌文学作品と深く結びついていた事実が丁寧に明かされる(第2章・第3章)。「香」というものの成り立ちや性格を考えれば、それが古典と緊密に関係しているであろうことは当然予想されることだが、そこを丹念に繙いて、「香」の本質の解明に実証的に寄与している点の特筆に値する。中でも第3章は、江戸前期に流布した『夫木和歌抄』の諸本を詳細に比較検討してその依拠本を天和2年刊の『夫木和歌抄抜書』と特定し、そのことによって組香成立の上限を解明、さらに『夫木和歌抄抜書』を活用する連歌との類縁性を指摘するなど、新見に富む。「源氏千種香」(『香道蘭之園』巻八・巻九)の組香が、『源氏物語』そのものではなく『源氏小鏡』(古本系の京都大学総合図書館蔵本の系統)に依拠していたことを明らかにした第4章とともに、この両章は第2部の双璧をなしている。なお、第1部で取り上げた『香名引歌之書』と比較して、香名と引歌の関係を詳述した第5章も見逃し難い。

従来、菊岡沾涼は、内藤露沾門の俳人(点者)としてその俳事が言及されるばかりであった。沾涼の文藝活動全体の中で、彼の香事はいったいどのように位置づけられるのか、この第2部を起点として、さらなる未開の領域に出願者の研究が進展することを強く願いたい。

研究の対象として、江戸中期に上方で版行されて流布した大枝流芳の伝書と、同時期に諸流の古法を集大成した写本の『香道蘭之園』を選んだのは妥当と言えるが、第1部と第2部の関係性が少々脆弱であることもまた事実である。組香の原拠の探索に囚われる余り、考証の羅列に終始しているところがまま見受けられるのも改善すべき点である。とは言え、全体として見ればそれらはやはり瑕瑾と見るべきであって、香道における文学受容の実態解明に大きな成果を上げていると判断される。そもそも香道の研究は、流派の壁が高く、伝授の様態の解明や伝書の科学的考察にも小さからぬ障碍が存するが、出願者の研究態度は努めて客観的であり、考証の過程にも得られた結論にも、それぞれ偏向した徴証は見出されない。論文として至極当たり前のことではあるが、あえて添記しておく次第である。

以上、わたくしども審査委員会は、本学位請求論文が、博士の学位を授与されるにふさわしい内容を具備していると判断し、ここに全会一致で審査を合格と認めるものである。